

## ◆ 第一話

陰惨で余所余所しい、悪党の都——占領後、ドイツ軍から鮫林寺しゃりんじと改称された  
バラトンバロン湖西岸の都市フユレド——に聳える、げるまん司令スーパーアリーナ部。

「あつ……プロトおつ……」

汗の臭いに満ちたその一室では、『鮫とは交尾する魚である』という、漢民族の優れた感性そのままの光景が展開されていた。

「イルザ様……ッ！ イルザ……様ッ！」

ベッド上でイルザ・ヴァレンシユタインに覆い被さっているプロトサメ人間は、汗びっしょりの体をひたすら前後させていた。勢い良く腰が打ち付けられる度に両者の接点から汗と蜜が舞い、下から逞しい腰回りに両太腿を絡める女性将校は嬌声を響かせる。

「ああつ……プロト……っ！」



ナチズムZZZこと、新機動国家社会主義超ドイツ労働者党の重要拠点<sup>枢軸のオウルフエンズ</sup>を預かる金の腫と褐色肌、そして茶の髪<sup>敷林寺</sup>の所有者は、非人道的な実験を繰り返す先端技術部隊の長として数多くの改造人間を世に送り出してきただけでなく、この拠点を統率してハンガリー西部に展開するソ連軍をしつかりと押さえ込む女傑だ。

「ふあつ……ああつ……!」

時刻は午前三時を過ぎていたが、日を跨いで続く夜伽が終わる気配はどこにもない。それどころかギリシャの哲学者アリストテレスが紀元前四世紀に記録した光景を悪趣味に再現する交わりは、更にその淫靡さを増しつつあった。

「愛しています……っ……イルザ様」

正常位で相手を突くプロトサメ人間は一旦挿挿を止めると、上半身そのものを叩き付けるかの如し勢いで口付けする。すぐに室内に響き渡る音は唾液まみれの舌同士が絡み合う、淫らなそれに切り替わった。

「ふああつ……んうっ……」

汗ばんだ額に髪を張り付け、左右の実も限界まで固くしているイルザは下から伸ばした両手で情人の濡れた頬を覆い、より激しく舌を絡ませていく。繋がったままのキス——プロトサメ人間と上下両方で溶け合う多幸福感が、彼女の体全体を支配している。

「イルザ様……ッ……素敵です、本当に……っ！」

およそ一分後、今度はプロトサメ人間の尖った鼻先が匂い立つイルザの左腋に押し付けられた。正当進化形サメ人間と違って人とサメの遺伝子比が七対三となっている彼はまるで貪り食うかのように頭そのものを動かし、ヒトのそれと大差ない舌で何もかも舐め尽くす。汗の滴も、毛の剃り跡も、全てを。

口を離れたプロトサメ人間は続いてイルザの右乳首を左手親指及び人差し指で弄りつつ、間髪入れず左側のそれを頬張った。

「ふあっ——」

疾うに感度が高まり切っているイルザは思わず仰け反るが、プロトサメ人間は

巧みな舌遣いと甘噛みを織り交ぜた妙技を構うことなく繰り出していく。

「はあっ……呼び捨て……呼び捨てにしてん……っ！」

それから二分経った頃、上限なき快感に悶えるイルザからそう言われたプロトサメ人間は、熱った肉壺に納まっている怒張が硬さを増すのを感じた。

「孕ませ……てんっ……っ！」

「わかった、イルザ」

潤んだ瞳に続いて言葉でもイルザが哀願すると、唾液まみれの乳首を解放したプロトサメ人間は両手で彼女の腰を掴む。そして、解放された『この雌を我が物としたい』という雄の本能に従って激しく腰を打ち付けていく。

「——っ」

数分後、ベッドを突き破らんばかりの律動の末にプロトサメ人間が呻いた瞬間、陰茎の中を駆け抜けた白濁は猛烈な勢いでイルザの胎内に流れ込み、既に何度も満たされている空間の僅かな残りを埋め尽くした。

「かかって……るんっ……！」

この瞬間を待ち侘びていたイルザは、喉奥から熱い吐息を漏らしつつ充足感に打ち震える。染色体構造等の関係で、プロトサメ人間からどれだけ多くの熱情を解き放たれても着床には至らず受精止まりだ。だが、受精はするのだ！

「すっごく……濃いんっ……！」

ゆっくりと引き抜かれる男根を恍惚の表情で見つめるイルザは、その先端から大きく上下する自分の腹に零れ落ちた滴を愛おしげに掬い取る。

「——あん」

それを指の第一関節ごと頬張った瞬間口内に生臭く苦い味が広がり、イルザは自分の芯が熱くなるのを感じずにはいられなかった。

「綺麗にしますん……っ」

あちこち染みだらけのシーツの上で身を起こしたイルザはすぐに屈み、呆然と天井を見上げているプロトサメ人間の長い陰茎を咥え込む。お互いの蜜と白濁で

酷く汚れた一物を、口で清めるために。

終